

「進路形成」概念の整理と検討

—— 教育学・教育社会学における進路形成研究のレビューを通して ——

栗 山 靖 弘

1. 問題の所在

1-1. 課題の設定

本稿は、教育学および教育社会学の領域で行なわれてきた「進路形成」に関する研究から、「進路形成」という概念がどのように用いられてきたのかを整理し検討を加えることを目的とする。

教育学・教育社会学において、「進路」を冠した語や概念を用いた研究は膨大な数にのぼる。特に、「進路指導」や「進路選択」に関する研究は非常に多くの研究者によって取り組まれており、特に教育社会学のなかでは中心的な研究分野のひとつだといえるだろう。こうした研究群を、「進路研究」と呼ぶこととする。

しかし、「進路研究」において重要な位置を占めるはずの「進路形成」に関しては、辞典にも掲載がなく、その定義を確認することができない¹⁾。本稿で検討するとおり、進路形成に関する研究も多くの蓄積があり、教育社会学においては看過できない分野であることはまちがいない。そのため、辞典にその定義が記載されていてもおかしくないはずだが、「進路指導」や「進路成熟」、または「進路選択²⁾」は記載があるものの、「進路形成」は記載されていない。

こうした状況を反映してか、実際の研究においても、「進路形成」という概念は、それをを用いる論者によってかなり異なった用い方をされている。すなわち、「進路形成」といっても、その指示内容は論者によって多様な意味を付与されているのである。

冒頭に述べたように、「進路研究」は教育社会学の中心的な領域のひとつといえてよい。だが、生徒の進路を研究の対象に据える学問であるはずの教育社会学において、「進路形成」に定義が与えられないままに使用されている状況にある。したがって、「進路形成」がどのような特徴をもつ概念であるのかは、それを用いた研究の検討を通じて明らかにせざるをえない。だが、逆に、「進路形成」に関するこれまでの研究が「進路形成」の語をどのような意味で用いてきたのかを明らかにすることで、「進路形成」の概念的な特徴を浮き彫りにすることができる。と考える。

以下では、これまでの進路形成研究を、「進路形成」という言葉に与えた定義

や説明を手掛かりに読み解いていく。検討する研究には、「進路形成」に定義を与えているものから、ほとんど説明のないものまで多様に含まれているが、本稿では、各論者の「進路形成」への意味づけが比較的明確に読み取れるものを参照しながら、「進路形成」概念の特徴を捉えていくこととする。そのため、本稿は一般的な研究動向やレビュー論文というよりは、「進路形成」という概念を従来の研究がいかに扱ってきたのかを軸に整理・検討するという性格をもつものである。

1-2. 「進路形成」概念の理論的特徴

以下で、これまで行なわれてきた研究の検討を通して「進路形成」概念を考察するが、それに先立って、「進路形成」概念の理論的な特徴について述べておきたい。ここでの作業は、以下で行なう文献レビューを通じた「進路形成」概念の検討とは水準の異なる作業であるが、「進路形成」の理論的特徴を把握しておくことで、進路形成研究を検討する際の足場をつくっておきたい。

まず、「進路形成」の特徴としてあげられるのは、「進路選択」と同時に使用されることの多い概念だということである。しかし、両者はまったく異なる概念である。「進路形成」概念が研究者の暗黙の前提のうちに成立していることを批判的に指摘した林（2014）は、これまでの「進路選択」や「進路形成」の研究が、「生徒たちの「進路選択」の積み重ねにより、「進路形成」がなされていくという暗黙の前提のもとになされてきた」と述べる（林前掲，p.8）。この指摘からは、以下の2つを読み取ることができる。第1に、「進路形成」が「「進路選択」の積み重ねによ」ってなされるものだということである。すなわち、複数回の進路選択が行なわれ、その結果が「進路形成」であると捉えられている。ここから、「進路形成」という概念は、複数回の選択（の結果）という、時間軸を必要とする概念であるといえる。

第2に、「進路形成」には、それを扱う研究者の視点が前提になっていることである。実際に、「進路選択」は「選択」する行為者（例えば高校生）にも観察が可能であり、同時に教育現場でもしばしば用いられる一般的な用語である。一方、「進路形成」が時間軸を必要とする概念であるということは、将来の地点から過去の自分の選択過程を客観的に振り返る作業が必要となるため、行為者からの観察は困難になる。したがって、複数回の選択の積み重ねである「進路形成」は、それを観察する研究者の視線が不可欠になると考えられる。

ところで、近年では「進路選択」を「プロセス」として把握し、高校生の3年間の進路選択過程を追った研究もなされている（中村編 2010）。そこでは、「進路選択というのは試験の可否のようにある一時点で一斉に決まるというものではなく、高校生活の中での様々な情報や学習、活動などを通じた試行錯誤のプロセスが本質的にともなうもの」とであるとされている（中村編 p.8）。しかし、そこでの中心は高校在籍期間の3年間における「進路選択」の過程である。たしかに、3

年間という時間軸上の選択を客観的な観察として把握する試みは、林（2014）の指摘した「進路形成」の特徴と整合的ではある。しかし、「進路形成」の想定する時間軸は、詳細は後述するが、高校3年間に限定されたものではなく、もっと広いレンジを念頭に置いている。そのため、本稿では「進路形成」を、中村編（2010）の用いた「プロセスとしての進路選択」とは異なるものとして扱う。

以上の点を踏まえて、これまでの研究で用いられてきた「進路形成」概念について検討を加える。

2. 対象

本稿では、タイトルもしくはサブ・タイトルに「進路形成」を含む論文・雑誌記事・著書を「進路形成研究」として扱うこととする³。ただし、大多和（2014）は、タイトルもしくはサブ・タイトルに「進路形成」が含まれていないものの、章のなかで「進路形成」の語が用いられており、内容的にも、高校生文化と進路形成に関するものであるため、検討の対象に含めることとした。

また、本稿は一部の例外を除いて、基本的に日本国内の「進路形成」を対象とする⁴。それは、「進路形成」が“career formation”の訳語であることによる。すなわち、“career”に「進路」という訳語があてられた時点で、日本国内での「進路形成」を想定した、ドメスティックな意味合いを帯びるようになるからである。もちろん、昨今、研究に限らずメディアでもとりあげられることの多い「キャリア形成⁵」が重要ではないということではない。しかし、「キャリア」に回収されずに使用されている「進路」に照準するからこそ、日本の教育学や教育社会学で蓄積されてきた「進路形成」の特徴が浮き彫りになるのではないかと考えた。

なお、本稿では、学会報告要旨は検討の対象にしていない。その理由は、学会報告要旨が非常に短い文章であることと、学会発表後に、論文や著書として同様の内容が発表されていることが多いことなどによる。

以上のプロセスを経て、本稿では最終的に46件の研究を対象とする。内訳は、著書5件、論文および雑誌記事41件である。

3. 「進路形成」概念の把握と整理

3-1. 初期進路形成研究における「進路形成」

——天野郁夫ほか（1983）「高等学校の就職指導と生徒の進路形成（Ⅰ）——就職指導の実態とその規定要因の検討」を手がかりに

天野ほか（1983）では、専門学科高校における進路＝就職指導の実態の把握を通じて、専門高校内で生徒の就職先に分化を生じさせる要因が、高校教師に対する質問紙調査をもとに分析されている。そのなかで、種類を異にする2つの「進

路形成」が用いられている。この論文は「高等学校の就職指導と生徒の進路形成（Ⅰ）——就職指導の実態とその規定要因の検討」というタイトルをもつ。この場合の「進路形成」がどのように扱われているか、以下にみてみよう。この論文を最初に検討するのは、それが「進路形成」をタイトルにもつ最初期の論文であることから、その後の進路形成研究に対して先鞭をつけた可能性が高いためである。そして、そのなかで「進路形成」について論者なりの説明が加えられていることも、検討の対象として最初に扱う理由である。なお、天野ほかの論文は8名の著者による共同研究であるため、当該箇所をどの論者が執筆したのかは、各引用部分の末尾に〔 〕で表示する。

就職指導が生徒にどのような影響を与えているか、生徒の進路意識形成過程を明らかにするための生徒対象質問紙調査（生徒調査）である。

〔Ⅱ章：樋田大二郎（p.47）〕

就職指導は分析的に2つの過程に分けられる。進路意識形成過程と進路振り分け過程とである。前者においては、生徒に知識や技能を付与したり、職業の内容や働くことの意味を教えるなどの職業的社会化を行い、生徒の進路意識を形成することが主たる内容となる。後者では、生徒をそれぞれの就職先に具体的に振り分けて行くことが主たる内容になり、この過程のなかで、学校は生徒に対して求人票の提示、生徒の企業への推薦すなわち学校推薦などの就職斡旋活動を行う。〔Ⅴ章：樋田大二郎（p.64）〕

前章で、多くの高等学校が成績原理に基づいた進路の振り分けを行っている現状が明らかにされた。それでは、進路意識形成過程の指導、なかでも職業選択過程の指導の現状はどうか、これも学業成績を重視しているのか、次にこの問題について考察したい。〔Ⅵ章：田中節雄（p.70）〕

就職指導は、大きく進路意識形成過程の指導と、進路振り分けの指導に分けて考えることができる。〔Ⅶ章：耳塚寛明（p.75）〕

ここで示したように、論文の主題に用いられている「進路形成」の1つは「進路意識形成（過程）」であることを、明確に読みとることができる。「進路意識形成（過程）」の具体的な内容は、樋田が述べているように、「生徒に知識や技能を付与したり、職業の内容や働くことの意味を教えるなどの職業的社会化を行い、生徒の進路意識を形成すること」であると理解できる（天野ほか、1983, p.64）。すなわち、卒業後、職業世界に参入する（あるいは希望する）高校生に、希望の職業に就くために必要な技能を身につけさせたり、労働の意味を教え、それによって生徒の進路（職業）に対する意識が形づくられる過程を指して、「進路意識

形成（過程）」と呼んでいる。

一方で、「進路意識形成」とは異なる意味において「進路形成」を用いている論者もある。

本章では、各校の卒業生の就職状況を手がかりに、高卒労働市場の構造について分析を進めてきた。これまでの分析によって、高卒労働市場が、学科や学力水準、学校の伝統、それに学校の所在地域によって構造化されていることが示された。これらの結果から、高卒労働市場においては、そこに参入する個々の生徒の資質・能力に先立って、学校のもつさまざまな属性が企業との実績関係を通じて市場の制度化を促していることが明らかとなった。このことは、生徒の進路分化という点からみると、次のことを意味する。すなわち、生徒にとって就職機会は、どの高校に入るかによって、あらかじめ大きな制約を受けているということである。換言すれば生徒の進路形成は、高校入学の時点で大きく方向づけられているのである。しかも、以下の諸章の分析が示すとおり、労働市場における学校の地位は、学校の就職指導のあり方を規定することによっても、生徒の進路形成に重大な影響を及ぼしているのである。〔Ⅲ章：荻谷剛彦（p.54）〕

ここでは、生徒の就職機会が、「どの高校に入るかによって、あらかじめ大きな制約を受けて」おり、「換言すれば生徒の進路形成は、高校入学の時点で大きく方向付けられている」と述べられている（p.54）。他の論者が用いた職業的社会化という意味での「進路意識形成」とは異なり、実態としての進路＝就職機会の制約という意味で「進路形成」が用いられていることがわかる。

とはいえ、異なる「進路形成」概念が用いられていることは、この論文の「進路形成」をめぐる認識の違いを反映しているわけではない。天野ほか（1983）が中心的に論じようとしたのが、前者の「進路意識形成」であることは、その対象が高校教師であることから明らかである。つまり、進路＝職業指導という、ガイダンスの差異によって、生徒の「進路意識形成」に差異が生じるという仮説が提出されているのである。荻谷だけが実態としての「進路形成」を用いているのは、荻谷の担当した章が「Ⅲ 高卒労働市場の構造と進路分化」であり、以下の諸章で展開される議論の下敷きとなっているからである。

しかし、各論者が用いている概念間の異同は、ここでは重要ではない。本稿の目的に沿って天野ほか（1983）を検討するならば、「進路形成」には、他の多くの研究にみられるような意味での、荻谷が用いた「進路形成」と、他の論者が用いた「進路意識形成」の2種類があるということである。管見の限りでは、「進路形成」をタイトルにもつ論文がはじめて発表されるのは1981年の、岩木秀夫（1981）による「中・高校生の学校生活と進路形成——中等教育の構造と機能に関する研究(1)」においてである⁶。天野ほか（1983）が発表されるのがその2

年後であることを考えても、進路形成研究が想定する「進路形成」概念は早期から複数の意味を内包していたと考えるべきである。

ただし、天野ほか（1983）以降の進路形成研究は、どちらかといえば荻谷の用いた、実態としての「進路形成」を中心に展開されていくことになる。そこで次に、荻谷の使用した「進路形成」概念を的確に要約している研究を参照することで、進路形成研究の主流となる「進路形成」概念の特徴を把握することにしよう。

3-2. 一元的な基準にもとづく選抜・配分と「進路形成」

—— 荒川葉（2009）『「夢追い」型進路形成の功罪 —— 高校改革の社会学』を手がかりに

続いて、天野ほか（1983）で荻谷が用いた実態としての「進路形成」を用い、さらにその変容を描いた研究を検討しよう。その代表的な作品が荒川葉（2009）による『「夢追い」型進路形成の功罪 —— 高校改革の社会学』である。ただし、荒川は「進路形成」を明示的に定義しているわけではない。そこで、「進路形成（の在り方）」を説明している記述を参考にすることで、荒川にとっての「進路形成」がどのような概念かを確認したい。

以下は、「高校教育改革前の進路形成の在り方と」、「第3の教育改革」について述べた箇所（荒川前掲，p.4）である。はじめに、「第3の教育改革」に関して、「第3の改革前には、大衆的な業績主義的競争が生起して」おり、「それと並行して、第3の改革前、日本には未曾有の選抜・配分社会が成立していた」と述べる（荒川前掲，p.5）。そして、「高校入学の段階で、一気に学力に基づく選抜が行われることになり、「どの高校に入学できたかで、高校卒業後、到達可能な上級学校や就職先までが実質ほぼ決定されることが明らかになった」」（荒川前掲，p.6）。このように生徒は、一元的な学力に基づく選抜・配分に巻き込まれて」おり、「そのことは生徒たちにもよく認識されていた」。すなわち、「生徒たちも学校の成績という一元的な基準で、将来の職業上の地位が決まってしまうことをわかっていたのである」。そして、ローレンを引きながら「「小学校から職場まで無駄なくつないだ効率の良い巨大な選抜・配分機関」、と学校を評価したといえる」と述べている。

ここまでの議論から、荒川の「進路形成」概念を整理しよう。まず、荒川の想定する改革前の「進路形成」は、戦後日本社会に特徴的な「よい教育→よい仕事→幸福な人生」という「サクセスストーリーを人びとに強く植えつけ、社会のすみずみにまでその構図をおし広げてきた」「大衆教育社会」（荻谷 1995, pp. i-iii）を前提とした「進路形成」だということである。すなわち、荒川にとっては、誰もが学力や学校の成績という一元的な基準による選抜と配分に巻き込まれ、それによって進学先だけでなく、将来の職業上の地位までもが決定される社会があり、ほかでもない学力（学歴）によって、その社会の階梯を上ることが「進路形成」であるととらえられている⁸。別様の見方をすれば、「旧来型の進路形成」

とは、生徒が将来的に就くことになる職業等を含めた社会的地位が、学校での成績に応じて可視化され、決定される状態を前提にしているといえる。つまり、「進路形成」は、学力という一元的な基準をもとにした業績主義的な選抜・配分および選択の連なりを意味しているのである⁹。

ところで、「第3の教育改革」によって、こうした「進路形成」には変化が生じているという。大衆教育社会を前提とした一元的な進路形成の変容は、以下のように説明される。

〔教育改革下における上位校と下位校での進路形成の分断化状況を踏まえて：括弧内引用者〕ここで浮かび上がってくるのが、旧来型の進路形成と、本書の題目にも掲げた「夢追い型」進路形成の対比である。旧来型の進路形成とは、明示的であれ、暗黙のうちにであれ一元的な序列尺度を前提とし、「より上の進路、より上の学校ランク」を目指す競争を通して実現されるものといえる。これに対して、本書がクーリングアウトの制度化と呼んでいる現象は、一元的な序列尺度を学校教育システム内でさしあたり無化ないしは否定し、生徒自身が抱えている「興味・関心」、そして、「将来の夢」を想起させ、それに関連づけた学習・進路選択を促すかたちでの指導が生起していることを意味している。（荒川前掲，pp. 88-89）

荒川の「進路形成」には、「旧来型の進路形成」と「夢追い型」進路形成」の2種類がある。「旧来型の進路形成」は、前述の大衆教育社会を前提とした一元的な序列尺度に基づく進路形成である。一方、「夢追い型」進路形成」は、教育改革によって生じた新しいタイプの進路形成であり、生徒の「興味・関心」や「将来の夢」に基づいた進路形成を指している。

ただし、注意しなければならないのは、社会全体が「夢追い型」進路形成」に変化したわけではないということである。荒川が述べているように、「こんにちでは社会の上の方に一元的な競争を繰り広げる社会が存在し、中、下の方に業績主義的な競争と離れたかたちで多元化した社会が存在するように変化してきた」のである（荒川前掲，p. 179）。本稿の目的にそって荒川の「進路形成」概念を検討するならば、「進路形成」として観察されるものが、社会の上方とそれ以下で異なったかたちをみせているということである。つまり、荒川は、社会や時代の変化、もしくは教育改革の影響によって、「進路形成」の内実が変化する可能性を示したのだといえる。

「進路形成」を「旧来型」と「夢追い型」に区分した荒川の議論は非常に魅力的ではある。だが、後述のように、進路形成研究の多くは「旧来型」を前提として組み立てられているため、以下では「旧来型の進路形成」に主眼を置いて検討を進める。

ところで、「旧来型の進路形成」という概念は、「夢追い型」進路形成」との

対比において「旧来型」とよばれている。そのため、「旧来型」というのは普遍的な記述ではない。そこで、以下では、「旧来型の進路形成」を、学力という一元的な基準による選抜・配分および選択の連なりという特徴を踏まえて、「業績主義的進路形成」と呼ぶことにする。

3-3. 業績主義的進路形成を前提とした研究

「業績主義的進路形成」という概念は、これまで暗黙のうちに研究者に採用されてきた「進路形成」の特徴を抽出していると思われる。換言すれば、これまでの進路形成研究は業績主義的進路形成、つまり学力という一元的な基準によって／＼を使って社会の階梯を登る（よい教育→よい仕事→幸福な人生）というかたちでの「進路形成」を前提としてきたと考えられるということである。

それでは、以下で業績主義的進路形成が前提とされている例をみてみよう。

どの高校に入るかによって将来が決まってしまう——高校受験をひかえた中学生やその親たちが、一つでも「ランク」の高い高校をめざすのも、このような学校格差の存在を前提としているからである。確かに、毎春明らかにされるように、有名大学への合格者は、高校ごとに大きく異なる。そして、進学校と呼ばれる高校ほど、そこへ入学すること自体困難である。（荻谷 1983, p. 69）

現在では自明のものとみなされている高校への進学だが、そこには、偏差値にもとづく「傾斜的選抜システム」や「層別競争移動」（竹内 1995）が隠れており、「一つでも「ランク」の高い高校を目指す」競争が行なわれている。そして「どの高校に入るかによって将来が決まってしまう」とさえいわれるのである（荻谷 前掲, p. 69）。この荻谷の指摘は、まさに業績主義的進路形成の典型ともいえる認識である。先述のとおり、「進路形成」をタイトルに持つ論文の初出が1981年であるため、1983年の荻谷の論文は、早期の進路形成研究である。したがって、この時期につくられた「進路形成」概念が、2009年に荒川によって「旧来型進路形成」＝「業績主義的進路形成」と捉えられたのである。

こうした業績主義的進路形成に対する認識は、時代を下っても引き継がれている。

教育達成の出身階層間格差は縮小していないが、女子でも教育達成を規定する中学時の成績の効果が強まり、また女子も進学校へ進むという形で進路形成過程に「成績原理」が浸透してきた。このことは女子の教育達成における階層間格差が、その達成過程の変化を伴いながら維持されてきたことを意味する。（尾嶋 2002, p. 133）

ここでは、女子の教育達成が、学校での学力にもとづく「成績原理」で判断され、それが「進路形成過程」と表現されている。注目すべきは、進路形成過程の変容について「女子（で）も」、成績原理が浸透したといわれていることである。このことは、女子と対比されている男子と同様に、成績原理の浸透が重要な意味をもっていると解釈できる。すなわち、もともと成績原理が浸透していた男子の進路形成過程に、女子の進路形成過程も接近したという解釈が成立する。したがって、ここでの「進路形成」も、業績主義的進路形成を指していると考えるべきである。

次にあげる3つの研究も、業績主義的進路形成を下敷きにしている。ただし、ここには、上記の荻谷（1983）と尾嶋（2002）とは異なった特徴がある。荻谷と尾嶋は、高校階層構造や入試による選抜、教育と階層の関係という、比較的広い領域を論じている。これに対して、以下に示す研究は、それぞれ、高校階層構造の下位に位置する弱小農業高校サッカー部員の就職（甲斐 1999）、中学校時代の不登校経験者の進路形成（森田 2001）、日本に暮らす外国人児童・生徒の進路形成（浅野 2013）という、非典型的な対象を扱っている点に特徴がある¹⁰。

生徒たち〔農業高校サッカー部員：括弧内引用者〕は少しでもいい就職を得ようと成績向上に勉めているわけでもない。進路形成準備のために退部した者はいない。〔略〕

彼らの職業選択は「どうしてもこの会社で」「できる限り「上」の職場というよりは「今ある条件で行けそうな職場」「とりあえず条件の良さそうな職場」という選択である。同じ自動車関連企業に就職を希望する者の間にライバル意識は感じられない。もっとおだやかな関係である。彼らからは学歴社会で少しでも「上昇」しようとするがむしやんな姿は見えてこない。（甲斐1999, p.11）

〔中略〕中学卒業後5年にわたる進路形成過程とその時々状況に対する評価を見ていく中で、不登校であったこと、すなわち別な言い方をすれば、「主たる教育ルートをはずれた」ことは、進学のみならず就職に関しても大きな影響を及ぼしうること、そして不登校に伴う「心の問題」が深刻になるかどうかは、この「進路の問題」がうまくクリアされているかどうかと大きく関わっていることがわかった。（森田 2001, p.2）

〔日本に暮らす外国人児童・生徒の教育に関する：括弧内引用者〕多くの先行研究が、小中学校までの若年層を対象とし、学校での日本語教育や母語能力、異文化を抱えるがゆえの不就学などに着目する一方で、子どもたちの高校進学やその先を見据えた、進路形成に関する研究は少ない。彼らが日本で生活し続ける場合、高校卒業資格の有無によって、職業選択の幅が大きく異

なることは言うまでも無い。(浅野 2013, p.81)

〔外国人児童・生徒に対して：括弧内引用者〕入学できる可能性の高い学校を勧めるのではなく、志望する学校へ入れるよう助言や支援をしなければ、進路を形成することはできない。(浅野 前掲, p.108)

まず、甲斐(1999)では、農業高校サッカー部員たちの就職に対する認識が、「少しでもいい就職を得ようと成績向上に勉めているわけでもない」と表現されている(甲斐前掲, p.11)。これは、成績の向上がよい就職先につながることを意味するため、「よい教育(成績)→よい仕事」という業績主義的進路形成の特徴が前提とされている。

また、森田(2001)は、中学校時代の不登校経験が「主たる教育ルートをはずれた」と言い換えられている(森田前掲, p.2)。学力や成績というワードは出てこないが、「主たる教育ルートをはずれた」ということを「学校に行っていれば、その後の進路形成には特に問題は生じなかった」ことの裏返しだととらえれば、学力や成績を使った選択と選抜の連なりである業績主義的進路形成に必要な学力が担保されなかったためだと解釈できる。したがって、ここでも業績主義的進路形成が前提となっているといえる。

浅野(2013)も、学力や成績といったワードを用いてはいないが、「進路形成」として「高校卒業資格の有無→職業選択の幅への影響」という、職業参入に対する学歴資格の問題を想定していることから、業績主義的進路形成が前提にされている。なぜなら、続く引用部分からもわかるように、「入れる高校より、本人の希望する高校へ」というメッセージを読み取ることができ、さらに、そうでなければ「進路を形成することができない」と述べている(浅野前掲, p.108)。すなわち、浅野も、業績主義的進路形成のように、小学校から就職までの一続きの選択と選抜の連なりとして「進路形成」を想定していると解釈できるのである。しかも、「彼らが日本で生活し続ける場合」(浅野前掲, p.81)という限定がかけられていることから、ここでの「進路形成」は日本国内での「旧来型の進路形成」であるといってい¹⁾。

さて、ここで先述の荻谷(1983)や尾嶋(2002)と対比した場合に、非典型的な事例を対象とした研究においても、業績主義的進路形成が前提とされていることがわかる。それは、対象である彼/彼女らが非典型的な事例であるがゆえに、典型的な事例よりも「進路形成」に困難が伴うことに起因すると考えられる。すなわち、非典型的な位置にいる児童・生徒を、より有利に「進路形成」が遂行できる層に接近させるための方途として、業績主義的進路形成が前提となる(もしくははならざるを得ない)と考えられるのである。

このように、従来の進路形成研究が、業績主義的進路形成を前提として組み立てられてきたことがわかる。特に、浅野(2013)の議論は進路形成研究に対して

示唆的である。浅野（2013）は、日本国内での「進路形成」を前提としている。今後、児島（2010）が描いたようなブラジル人青年に限らず、国境を越える移動はますます盛んになることが予想される。その際、業績主義的進路形成を支えてきた前提はその限界（インターナショナルな枠組みの欠如）を顕在化させることになるかもしれない。しかし、本稿はあくまで、こうした研究の検討を通じて業績主義的進路形成の特徴を描き出すことを目的としている。したがって、国際的な進路形成という論点の検討は本稿の課題を超えているため、他稿を期すこととしたい。

4. 「進路形成」の代理指標としての「進路志望」

4-1. 「進路志望」を代理指標としている研究

次に、なんらかの代理指標を立てることで、それを「進路形成」として扱っている研究を検討する。冒頭でも述べたように、「進路形成」には明確な定義がなされていないため、その意味は抽象的にならざるをえない。そこで、他の指標を用いて「進路形成」を代表させるという方法が採用されている。論を先取りすれば、以下でとりあげる研究は、いずれも高校生の「進路志望」（高校卒業後に希望する進路先）を「進路形成」の代理指標として扱っている。

ここでは榊原（1992）、樋田ほか（1999）、大多和（2014）を中心に検討する。また、「進路志望」が「進路形成」の代理指標として採用される／やすい理由についても考察を加える。

本論文は、高校生の進路意識の生成と変容が、彼らの学校生活といかに関連するかの分析を通じて、生徒文化における進路形成の位置を検討するとともに、学校文化論を踏まえた学校経営の方向性について考察することを意図している。（榊原 1992, p.71）

ここでいう進路意識とは、生徒が高校卒業後、どのような方向を取ることを希望、予定、あるいは未定であるかを指す。それは、具体的には大学、短期大学、専門学校などへの進学、就職やそれ以外の進路、または不明の状態を含むものである。（榊原前掲, p.73）

この章の目的は、次の2点にある。

①79年と97年の2時点間で、生徒の進路志望はどう変化したのか。

②2時点間で、生徒の進路志望を規定する構造は、どう変わったのか。とりわけ、そこにおける学校ランクの位置は、どう変容したのか。

この作業をととして、進路形成面から、「トラッキングの弛緩」を仮説的キーワードとした高校教育の変容に迫るのがこのセクションのねらいである。(樋田ほか 1999, p.137 [耳塚])

このセクションは、こうして「トラッキングの弛緩」をキー・パースペクティブとして、1979年から1997年の間に生じた、高校生の進路形成の変容を探る試みである。具体的には、第1にこの間にみられた高校生の進路志望の変化を、全体および学校ランク別に分けて記述した後、第2に生徒の進路志望を規定する構造を、数量化理論Ⅱ類を用いて明らかにする。その際、とくに1979年と1997年の間で、学校ランクの規定力がどう変化したのかに重点を置く。(樋田ほか前掲, pp.139-140 [耳塚])

本章の分析では、^①ある社会階層出身の個人がトラッキングのどの位置に所属し、どのような進路希望を持つようになるのかを追っていく。

^②ここでは、シンプルな形で「出身階層—トラッキング—進路形成」の構造を示す。「第二次生徒文化研」では、生徒の進路形成に及ぼす出身階層の影響が1979年当時よりも1997において拡大していることを強調する形でトラッキングの変容を捉えた。〔中略〕ここで押さえたいのは、いまでもトラッキングによってどの程度チャンスが開けているか、についてである。

(大多和前掲, p.36, 下線部に付した番号(①②)は引用者による)

このように、いずれの論者も「進路形成」に代わる指標として「志望進路」を採用していることがわかる¹²。そして、いずれの研究においても、学校での成績(榊原1992)や、その反映である学校ランク(樋田ほか前掲[耳塚], 大多和2014)と「志望進路」との関係を取り上げていることから、これらの研究も業績主義的進路形成に属しているといえる。それでは、各々の具体的な内容を確認していこう。

まず、榊原(1992)は、「進路意識」を高校卒業後の進路(「大学、短期大学、専門学校などへの進学、就職やそれ以外の進路、または不明の状態」(榊原前掲, p.73))の希望・予定・未定と定義していることから、志望進路が「進路形成」の代理指標であることは明らかである。

耳塚も、生徒の「進路志望」を「進路形成」の代理指標としている。具体的には、高校生が「1.就職、2.家事・家の手伝い、3.専門学校・各種学校、4.短期大学、5.四年制大学(私立)、6.四年制大学(国立)」(樋田ほか前掲, p.140)のなかで、79年と97年の間で希望する割合の変化をもって、「進路形成の変容」を描いている¹³。

最後に、大多和(2013)も、下線部①および②の対応関係をみると、①「社会階層出身」が②「出身階層」に、①「トラッキング」が②「トラッキング」がそ

れぞれ対応していることから、①「進路希望」が②「進路形成」に対応していると考えてまちがいない。また、実際の分析においても、「表1-2 希望進路の変化」「表1-3 トラック別進路希望の変化」があげられていることから、大多和が「希望進路」を「進路形成」の代理指標として扱っていることは明らかである。

4-2. なぜ「進路形成」の代理指標として「進路志望」が採用されるのか

これまでみてきたように、「進路意識」や「志望進路」、「大学進学希望」という違いはあるものの、高校卒業後の進路が、「進路形成」の代理指標として用いられてきた。ここでは、卒業後の希望進路が「進路形成」の代理指標として妥当かどうかということよりも、「進路形成」の代理指標としてなぜ志望進路が選ばれるのかということが重要である。そこで、本節の最後に、「進路志望」が「進路形成」の代理指標として採用される／されやすい理由を考察しておきたい。

ここで議論の補助線を提供してくれるのが、先に検討した業績主義的進路形成である。すなわち、「一元的な序列尺度を前提とし、「より上の進路、より上の学校ランク」を目指す競争を通して実現される」という「旧来型の進路形成」＝業績主義的進路形成をベースとして、そのひとつの、つまり高校入試という選抜の結果である高校の学校ランクが、まずは想定される。この日本の高校階層構造を可視化する学校ランクが、志望進路を規定することは、日本の教育社会学が扱ってきた古典的なテーマでもある（例えば、岩木・耳塚 1983など）。つまり、業績主義的進路形成を前提として、そこに高校階層構造による希望進路の分化というテーマが挿入されることで、志望進路が「進路形成」の代理指標として採用される／されやすいのではないかと考えられる。

つまり、「進路志望」が、特に高校生の「進路形成」の代理指標として用いられる理由は、日本の学校の中でも、高校が「一元的な選抜・配分の中核的機構」（荒川前掲, p.10）として機能し、質・量ともに生徒の進路分化を特徴づける指標だからだと考えられるのである。

5. 現在の学生生活と将来の職業（生活）との関係を問う研究

次に、現在の学生生活と将来の（希望する／参入することになる）職業との関係を問うことで「進路形成」と捉えている研究を検討する。これらの研究は、業績主義的進路形成を下敷きにしながらも、(1)広義の職業教育をテーマとする研究と、(2)将来の夢や目標に照らして、それへの準備や他の要因の影響を考察する研究の2つに大別される。以下、それぞれの内容について検討しよう。

5-1. 職業教育を通じた進路形成

はじめに、丸山・山崎（2010）は、「〔商業高校の：括弧内引用者〕教員と受け入れ企業のインターンシップに関する意識を明らかにすることにより、生徒の進

路形成に対して望ましいインターンシップの取り組みや、学校と企業のパートナーシップについて考察」している（丸山・山崎前掲，p.71）。その際の「生徒の進路形成に対して望ましいインターンシップ」とは、どのようなものだろうか。研究目的の部分で以下のように述べられている。

高校生は、卒業後すぐに就職する者もいれば、進学する者もいる。進学者も2～4年後には、社会に出て職業に就くことになる。就職後も、生徒を安易に中途離職させないために、生徒自身が選択した道において、生涯を通じてへこたれず、タフに生き抜いていける力を身につけさせなければならない。

（丸山・山崎前掲，p.71）

すなわち、「生徒の進路形成に対して望ましいインターンシップ」が指しているのは、中途離職せず、生涯にわたってタフに生き抜いていける力を身につけさせるために行なわれるものである。そのため、ここでの職業教育を通じた「進路形成」とは、物理的に職業世界で生きていくことを指している。また、結論部分で「企業は、「働くことの意義を学ぶ」ことを目的とする中学校段階と、「就職を目前とした職場体験」を目的とする高校生段階のインターンシップとの違いを考慮していない」（丸山・山崎前掲，p.83）と述べられていることから、「職場」に対する予期的社会化を目的としていることがわかる。このように、丸山・山崎の捉える、職業教育を通じて行なわれる「進路形成」は、商業高校の生徒が、高校卒業後に参入することになる職業世界で生きていくための精神的・実践的トレーニングを指しているといえる¹⁴。

一方、次の2人の論者は、より具体的な職業教育を念頭において「進路形成」をとらえている。

寺田（2009）は、日本・中国・韓国・インドネシアの高校生を対象に、各国の職業観形成の特徴を描いている。本文に「進路形成」が用いられていないため、文脈から判断せざるを得ないが、「進路選択・決定プロセスにおける教育活動・進路指導の内容と影響」（寺田前掲，p.3）および「進路決断状況」（寺田前掲，p.5）を指して「進路形成」と呼んでいると考えられる。ただし、寺田の主眼は「職業観形成」に置かれているため、「進路形成」と「職業希望」の組み合わせとして「職業観形成」を指していると考えられるべきであろう。いずれにせよ、高校生の将来の職業に対する意識に「進路形成」をみていると考えられる。

次に、樋田（2005）は、「日本とシンガポールの高卒労働力に対する位置づけの違いに焦点を当てながら、両国で進路形成と学習の奨励がどのように関係づけられているかを検討」した（樋田前掲，p.8）。高卒労働力の採用について、樋田は「訓練可能性や授業外で獲得される態度や資質を重視する」日本と、「即戦力で採用される」シンガポール（樋田前掲，p.7）という認識のもとに、両国の進路指導および職業教育の差異を考察している。結論として、日本とシンガポー

ルの学校で伝達される学習内容は、シンガポールの方が「学習内容と進路とのレリバンシー」が高いという知見を得ており（樋田前掲，p. 32），ここでは，将来の職業生活を想定した職業教育や進路指導が「進路形成」と捉えられている。

そのなかで，将来の職業生活に関する項目として，「仕事についたときに，すぐに役立つ知識や技能」，「将来の職業生活についての見通し」（樋田前掲，p. 19），「つきたい職につける見込みや，そのために何が必要か教えてくれる」，「できるだけいい大学や就職先に入れるよう，成績を上げたい」（樋田前掲，p. 25）等の項目がたずねられている。最後の「できるだけいい大学や就職先に入れるよう，成績を上げたい」は，業績主義的進路形成的な前提も含まれているが，樋田の主眼は職業教育に置かれているため，教育内容の職業的レリバンスにあるとみるべきである。したがって，生徒が将来的に就くことになる職業生活に対する学校の働きかけをもって「進路形成」と捉えていると考えられる。

樋田の研究が示唆的なのは，「進路形成」を論じるにあたって，教育内容のレリバンスに注目したことである。業績主義的進路形成が，学力や成績，もしくは学歴といった一元的な基準をもとにした選抜・配分と選択の連りを指していることは繰り返し述べてきた。しかし，業績主義的進路形成では，身につけた学力の高低や多寡は問題とされていたが，その内容の有意味性については不問に付してきた。すなわち，学力を「どれくらい身につけたのか」が重視されてきた一方で，「何を身につけてきたのか」はそれほど重視されてこなかったということである。進路形成研究に，職業世界における学習内容のレリバンスという視点を持ち込んだ点で，樋田（2005）は「進路形成」のひとつの領域を拓くものであるといえる。

5-2. 現在の学生生活と将来の夢や目標との関連を問う研究

続いて，現在の学生生活と将来の夢や目標との関連を「進路形成」ととらえた研究を検討しよう。

上間ほか（2003）は，A 高校に「在学中の若者の進路形成の過程」を，「インタビューを通して窺い知ることの出来た，高校卒業後に「希望」された進路と将来ビジョンがどのようなものか，そしてそこに学校と家族の影響がどのように反映しているのか」を考察している（上間ほか前掲，p. 55）。ここから，上間らの捉える「進路形成」が「高校卒業後に「希望」された進路と将来ビジョン」であることがわかる。これは，前節で検討した，代理指標としての「進路志望」とは異なる。代理指標としての「進路志望」は，高校卒業後すぐに希望する進路先であったのに対して，上間らが考察の対象としているのは，「将来ビジョン¹⁵⁾」＝将来の夢や目標だからである。すなわち，将来の夢や目標を最終的なゴールといったん定めたいうで，現在の生活や，高校卒業後の志望進路，そしてそれらへの準備や家族の影響を問うている点で，代理指標としての「進路志望」とは異なるアプローチである。

上間ほか（2003）に近いアプローチで、栗山（2012）は、高校野球強豪校の部員に対するインタビュー調査を実施し、部員の大学進学に関する認識と将来就きたいと考えている職業との関連を考察している。「〔部員の〕スポーツ関連産業への就職希望，すなわち，野球を軸とした進路形成」（栗山前掲 p.181）ととらえていることから、栗山（2012）も現在の生活と将来の夢や目標との関連を問うた研究であるといえる。

これらの研究は、主として高校生の、まだ実現されていない将来の目標＝対象者の主観を観察することで、どのような進路を形成しようとしているのかを分析するタイプの研究として進路形成研究の一領域をなすものである。これらの特徴は、高校生のある一時点での観察に基づいて「進路形成」を捉えようとしている点である。冒頭で検討した「進路形成」の特徴のひとつである時間軸の必要性を、まだ実現されていない高校生の将来の目標までの達成プロセスとして応用するという意味で「進路形成」を用いていると考えてよいだろう¹⁶。

6. 業績主義的進路形成の新たな局面——非直線的進路形成と選抜方法の多様化

これまで検討してきた業績主義的進路形成とは異なる経路や基準による「進路形成」を想定した研究も見られるようになってきている。

はじめに、大学の編入学者の進路形成を論じた濱中（2008）をみてみよう。

〔学士過程の：括弧内引用者〕編入学の一般化により、若者の進路選択を高卒時、入学試験時の一時点の問題に収斂させるのではなく、もう少し長いスパンで徐々に進路を形成・確定していくプロセスとして捉えることができるようになる。（濱中 2008, p.109）

学生の流動化を若者の進路形成プロセスの長期化・多様化の観点から捉えた場合、例えば高卒時にいったん就職した後に大学へ進学するといったルートもその視野に含まれなくてはならない。（濱中前掲, p.122）

濱中（2008）は、従来の進路形成研究とは異なった視点から「進路形成」を捉えている。その特徴は、「学生の流動化」＝編入学生の増加という視点から、進路変更が可能になる仕組みを取り上げており、業績主義的進路形成が想定してきた「直線的に形成される進路」というイメージに修正を迫るものであるといえるだろう。このことは、業績主義的進路形成に対して、進路の変更可能性の広がりという視点を提供する議論であるといえる。つまり、濱中（2008）から受ける示唆を本稿の目的に沿って解釈するならば、これまで単線的に捉えられてきた「進路」が、高校→就職→大学というように、教育機関と職業世界を循環しながら形成さ

れるようになる可能性があるということである。

〔運動部活動での実績という：括弧内引用者〕多様な能力の一つの側面を評価されてスポーツ・体育推薦で入学し、その能力を発揮して体育会活動を行っている体育会所属大学生たちが学生生活を享受し、大学卒業後の進路形成をするといったかたちで教育を受けることを保証することも大切だ。

(西島 2014, p.14)

西島 (2014) は、業績主義的進路形成の特徴である、学力による選抜・配分と選択の連なりではなく、運動部活動での実績による「進路形成」を描いている。従来の進路形成研究が前提としてきた学力という基準を相対化している点で新しい進路形成研究の一分野を開く議論ではあるが、「業績」の内容を学業成績から運動部での実績に変換した議論だという捉え方も可能である。しかし、「多様な能力の一つの側面を評価される」という論点は近年の選抜方法の多様化の議論にも通じる部分であり、学力を一元的な基準とした業績主義的進路形成研究に広がりを与える議論の嚆矢である。

ここでとりあげた濱中 (2008) や西島 (2014) のように、少数ではあるが、これまでの業績主義的進路形成に広がりを与える議論も出てきている。この点を、3-3で指摘した浅野 (2013) や児島 (2010) などの国際的な移動を伴う進路形成とあわせて考えるならば、日本国内での単線的な進路形成を想定してきた業績主義的進路形成は、今後さらに多様な意味を帯びる可能性がある。

7. 結語 —— まとめと課題

本稿では、教育学および教育社会学で行なわれてきた進路形成研究のレビューを通じて、それぞれの論者が「進路形成」をどのように用いてきたのかについて、「業績主義的進路形成」を軸に整理・検討を加えてきた。最後に、本稿で得られた内容をまとめ、今後の課題を示しておきたい。

7-1. 本稿のまとめ

はじめに、「進路形成」は「進路選択」とは異なり、(i) 時間軸を必要とすること、また (ii) 行為者ではなく観察者としての研究者の視点が不可欠な概念であることを示した (1-2)。

続いて、最初期に取り組まれた進路形成研究のレビューから、「進路形成」概念が「進路意識形成」と「実態としての進路形成」という異なる意味を内包するものであり (3-1)、そして、後者の「実態としての進路形成」は、学力という一元的な基準をもとにした選抜・配分および選択の連なりとして把握され (3-2)、他の進路形成研究でも前提とされていた (3-3)。本稿ではこうした「進路形成」

を「業績主義的進路形成」と呼んだ。

続いて、「進路形成」の内実が抽象的であるため、何らかの代理指標を立てることで「進路形成」を捉えようとしている研究を検討した。それらの研究は共通して、高校卒業後の「進路志望」を代理指標としていた（4-1）。このことは、日本の高校階層構造の特徴である、高校ごとの進路分化を説明するための指標として採用されていると考えられる（4-2）。

次に、現在の学生生活と将来の職業との関係を問うことで「進路形成」と捉えている研究を検討した。そこには、「職業教育を通じた進路形成」および「現在の学生生活と将来の夢や目標との関連を問う研究」の2種類があり、前者は、学校での職業観の形成や、教育内容の職業的レリバンスの涵養を通じた教育的な働きかけが「進路形成」であると捉えられていた（5-1）。後者では、冒頭で述べた「進路形成」の特徴である、時間軸の必要性が想定されながらも、まだ実現されていない高校生の将来の目標をひとまずのゴールと定め、そこに向けての準備や周囲の影響を考察することで「進路形成」を捉えているという特徴がみられた（5-2）。

最後に、業績主義的進路形成の新たな局面として、大学の編入学者を中心とした学生の流動化による非直線型の進路形成と、入学者選抜方法の多様化を踏まえた議論の可能性を拓く、運動部活動での実績という学力以外の基準による進路形成が示された（6）。

7-2. 今後の課題

本稿では、進路形成研究の検討を通じて、各論者が用いてきた「進路形成」の特徴を整理してきた。しかし、その中心は、「旧来型の進路形成」に基づくものであり、日本の教育社会学で議論されてきた業績主義的な選抜・配分の延長線上にある「進路形成」に偏った整理になっている。それ以外の「進路形成」も看過できない特徴をもっているため、それらの検討については、今後の課題としたい。

業績主義的な「進路形成」以外の進路形成研究とは、ノン・メリトクラティックな、つまり学業成績という一元的な基準をもとにした選抜・配分を前提としない「進路形成」である。これらは次の3つのタイプに大別される。第1に、荒川（2009）の「「夢追い」型進路形成」に属するタイプの研究である¹⁷。ここでは、教育改革によって生じた高校進路指導の変容による進路形成への影響（望月 2007, 荒川 2009）と、荒川の研究を踏襲した長尾（2009）の研究に分けられる。第2に、ジェンダー要因が生徒・学生の「進路形成」に及ぼす影響を分析した研究である（中西 1998, 酒井ほか2006）。特に、中西（1998）は、学業成績というメリトクラティックな「進路形成」を、ジェンダー要因によって相対化する作業を展開していること、そして、管見の限りではあるが、ノンメリトクラティックな「進路形成」を論じた嚆矢でもあるため、そこでの「進路形成」の含意の抽出が求められる。第3に、高校生の進路分化を「地域」というノンメリトクラティ

ックな要因で説明した研究である（中西 2012）。

これらの研究は、従来の業績主義的進路形成が前提としてきた成績による一元的な選抜・配分および選択の連なりという点を更新しようとしているため、「進路形成」の意味内容が大きく異なる可能性がある。そのため、この点に関しては稿を改めて論じることとしたい。

<註>

¹ 例えば、『新教育社会学辞典』、『新社会学辞典』、『現代社会学辞典』など。

² 『新社会学事典』による。

³ 藤原・仙崎（1985）は、タイトルに「進路形成」が含まれているものの、本文中には「進路形成」は用いられていない。代わりに「教職意識の形成」（藤原・仙崎前掲，p. 2）が用いられているが、これは一般的な「進路形成」とは意味合いが大きく異なると判断したため、検討の対象から除外した。また、山田（2005）は、九州大学の「九大人間環境学研究院いつでもオープンキャンパス」が、そこに参加した高校生の進路形成に与える影響を考察している。しかし、そこでは、高校卒業後の進路選択を「進路形成」として扱っていること、そしてそれが「進路設計」という用語で言い換えられており、前節で検討したように「選択の積み重ねとしての進路形成」とは異なる概念として扱われている。そのため、山田（2005）も検討の対象から外すこととした。樋田・中西ほか（2011）および樋田・大多和ほか（2011）については、「進路形成」というよりも、「単線型メリトクラシー・パラダイム」の考察に重きが置かれているため、本稿の対象には該当しないと判断した。

また、黒田・三浦（2001）については、ある総合高校の「入学動機と入学時の進路希望とその変遷を通してどのように進路形成がなされたのかを考える」ことが論考の中心である。そのため、「進路形成」を、先述の中村編（2010）の、プロセスとしての選択に近い概念として用いていると判断した。上原（2008）は、複数の大学の学生がサークル活動を通じて成長する様子を記録したもので、サークル参加者が大学・短大卒業後にどのような進路を選択したのかが記されている。したがって、「進路形成」というよりも進路選択と表現すべき内容であるため、検討の対象としない。

⁴ 例えば、京免（2006）はフランスの、鴨川（2005，2008a，2008b，2010）はマレーシアを事例として「進路形成」を論じている。後述するように、日本国内に限らず、海外もしくは国際的な移動を伴う進路形成も重要な論点である。だが、外国や国際的な移動を伴う進路形成では、教育制度も労働市場の特徴も異なることから、日本国内の「進路形成」概念での説明には限界があると考えられる。そのため、こうした論点については別稿で改めて論じることとしたい。

⁵ 寺田（2005）は、「キャリア形成」を「児童・生徒・学生から成人・高齢者に至るまでのキャリア発達の視点にもとづき、個人レベルのキャリアデザイン

や進路選択、キャリア学習と、組織・行政レベルの計画的キャリア教育・職業教育訓練（能力開発）及び家庭・地域、学校教育や産業組織の職業的・生活的キャリア創出に関する非公式的作用の総体的・連続的過程である」と定義している。本稿が主な関心を置くのは、児童・生徒の学校教育を経由した「進路形成」であるため、家庭や地域、行政レベルからの影響を意識する「キャリア形成」とは異なるものである。

⁶ ただし、岩木（1981）の本文中には「進路形成」は登場しない。

⁷ 「『第3の改革』は教育の達成目標を高い学歴から、個人の「興味・関心」、「将来の夢」にすることで、社会的に厳然として存在するように感じられてきた目標（外在化された目標）を、自分の内なる価値に合致させ、学歴獲得競争の緩和を生み出そうとしたのである」（荒川前掲，p.9）と述べられていることから、学校で身につけた学力が、学歴に変換されるという意味において、ここでの学力と学歴は同義に用いられていると考えてよいだろう。

⁸ 大多和（2014）の「伝統的な進路形成」も、「旧来型の進路形成」を指していると考えてよいだろう。「学校が「やりたいこと」や「自己実現」にかかわって簡単に別の教育実践——たとえば伝統的な進路形成を目指すような実践——を行うことができるかどうかは別問題であるように思われる」（大多和2009，p.21）。

⁹ 荒川（2001，2002）も、「進路形成」を荒川（2009）と同義に使用している。

¹⁰ 明確には述べられていないが、高口・生田（1991）も、養護児童の進路形成に対して高校進学保障の問題や、高校中退を問題としてとらえていることから、業績主義的進路形成を前提にしていると考えられる。

¹¹ ちなみに、浅野のように、外国人の児童・生徒の日本国内での「進路形成」を想定するタイプの研究群に対して、児島（2010）は「ニューカマー研究において、教育支援といえば「児童・生徒」への日本語指導や適応指導が主な関心事であったのは、日本国内での進路形成を前提としてきたからにほかならない」と批判している（児島前掲，p.254）。児島は「この調査は、ブラジルと日本を行き来するブラジル人青年の進路形成について、渡日や帰国の経緯、家族生活、学校生活、余暇の過ごし方、将来展望など、多様な側面から理解することを目的とし」ており（児島前掲，p.254）、「国境を越える移動をとまなうブラジル人青年の進路形成は、移動の主体性（本人の意志による移動か否か）、親の教育戦略、社会関係資本、日本／ブラジル両国における教育支援制度などが複雑に関連しあうなかでなされていく」としている（児島前掲，p.255）。したがって、児島は日本という一国内での「進路形成」を念頭においていないため、「旧来型進路形成」というドメスティックな枠組みのみを採用しているわけではない。そのため、本稿で中心的に扱っている「進路形成」概念とは趣を異にするものであるため、註記するにとどめておきたい。

¹² 「志望進路」ではないが、林（2006）も「どんな学校を出たかで人生が決ま

ってしまう」,「学歴は本人の実力をかなり反映している」等の代理指標を用いて、高校生の「進路形成」をとらえていると考えられる(林前掲, p.43)。ここで「考えられる」と述べたのは、林(2006)のタイトルである「若者の進路形成と自己実現を求める意識」の「進路形成」と「自己実現」が明確に弁別されていないからである。したがって、上記の質問項目が、「進路形成」と「自己実現」のどちらを捉えようとした代理指標なのかを判断することは難しい。そのため、本来ならば、「志望進路」以外の代理指標として本文で検討すべき内容ではあるのだが、ここでは註での説明に止めることとした。

¹³ この後、樋田・田中ほか(1999)は樋田・耳塚ほか(1999)とともに樋田ほか編(2000)としてまとめられることになる。その際、耳塚の執筆担当部分(耳塚 2000)が、「進路選択の構造と変容」というタイトルに変更されている。しかし、内容はほぼ同一のものであり、記述内容も「進路形成」が用いられていることを付記しておく。

¹⁴ 鹿嶋(2002)も、高校生の就業体験や中学生の職場体験をもとに、勤労観やコミュニケーションスキルの涵養を主張していることから、丸山・山崎(2010)に近い立場の論考であるといえる。

¹⁵ 例えば、スチュワード、スポーツトレーナー、社会科の先生、看護師、保育士、コンサートスタッフ等があげられている(上間ほか前掲, pp.56-64)ことから、「将来ビジョン」が将来の夢や目標を指していることは明らかである。

¹⁶ 高校生の将来の目標をひとまずのゴールと仮定して、そこへの主観的な道筋を観察することが「進路形成」とよびうるならば、先にあげた荒川(2009)の高校生へのインタビュー調査もここでの検討に含まれる可能性がある。しかし、荒川は「第3の教育改革」によって生じた進路指導やカリキュラムの変容にも重心が置かれている。そのため、高校生への調査のみから構成された上間ほか(2003)および栗山(2012)とは区別されるものであると考える。

¹⁷ 堀(2004)も、「脱標準化社会」における「進路形成」を「自らの物語をプロデュース」することであると述べていることから、ノン・メリトクラティックな進路形成を念頭に置いていると考えられる。

<文献>

天野郁夫・耳塚寛明・田中節雄・荻谷剛彦・樋田大二郎・油布佐和子・大野道夫・志水宏 吉, 1983, 「高等学校の就職指導と生徒の進路形成(I)——就職指導の実態とその規定要因の検討」『東京大学教育学部紀要』第23巻, pp.45-76.

荒川葉, 2001, 「カリキュラムの多様化と生徒の進路意識の変容——総合学科における進路形成再考」『教育制度学研究』第8号, pp.68-71.

——, 2002, 「高校生の「将来の夢」と進路形成」『月刊高校教育』第35巻第11号, pp.32-36.

- , 2009, 『「夢追い」型進路形成の功罪 —— 高校改革の社会学』東信堂。
- 浅野麻奈, 2013, 「外国人児童生徒の進路形成 —— 地域社会の課題と実践の考察」『国際地域文化研究』第8号, pp. 81-117.
- 藤原正光・仙崎武, 1985, 「教職志望学生の進路形成(1) —— 教育学部大学生の教職志望動機と教職観」『進路指導研究: 日本進路指導学会研究紀要』第5巻, pp. 1-5.
- 濱中義隆, 2008, 「「学生の流動化」と進路形成 —— 現状と可能性」『高等教育研究』第11集, pp. 107-126.
- 林明子, 2014, 「生活保護世帯に育つ子どもの中卒後の移行経験に関する研究」『教育社会学研究』第95集, pp. 5-24.
- 林寛子, 2006, 「若者の進路形成と自己実現を求める意識 —— 高校生調査より」『やまぐち地域社会研究』第4号, pp. 41-52.
- 樋田大二郎, 2005, 「高校における進路形成と学習奨励の統合 —— 日本とシンガポールの高校進路形成と学習奨励についての比較調査から」『聖心女子大学論叢』第105集, pp. 7-37.
- 樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦・金子真理子, 1999, 「高校生文化と進路形成の変容(1) —— 1979年調査との比較を中心に」『聖心女子大学論叢』第92集, pp. 113-188.
- 樋田大二郎・堀健志・大多和直樹・耳塚寛明, 1999, 「高校生文化と進路形成の変容(2) —— 1979年調査との比較を中心に」『聖心女子大学論叢』第93集, pp. 41-125.
- 樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編著, 2000, 『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。
- 樋田大二郎・中西啓喜・岩木秀夫, 2011, 「単線型メリトクラシーパラダイムの再考(I) —— 「高校生文化と進路形成の変容(第3次調査)」より」『教育人間科学部紀要』第2号, pp. 1-22.
- 樋田大二郎・大多和直樹・金子真理子・岡部悟志・堀健志, 2011, 「単線型メリトクラシーパラダイムの再考(II) —— 「高校生文化と進路形成の変容(第3次調査)」より」『教育人間科学部紀要』第2号, pp. 23-44.
- 堀健志, 2004, 「「渡りの危機」を考察する —— 脱標準化社会の進路形成」『教育』第54巻第2号, pp. 114-121.
- 岩木秀夫, 1981, 「中・高校生の学校生活と進路形成 —— 中等教育の構造と機能に関する研究(1)」『東京大学教育学部紀要』第20巻, pp. 59-86.
- , 1993, 「進路選択」, 森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』有斐閣, pp. 805-806.
- 岩木秀夫・耳塚寛明, 1983, 「概説 高校生 —— 学校格差の中で」岩木秀夫・耳塚寛明編『現代のエスプリ高校生 —— 学校格差の中で』No.195, 至文堂, pp. 5-24.

- 甲斐健人, 1999, 「農業高校運動部員の「経歴」と進路形成 —— 「底辺」における「実践」の再検討」『ソシオロジ』第44巻2号, pp. 3-18.
- 鹿嶋研之助, 2002, 「提言③ 子どもの進路形成における学校, 家庭, 地域の役割」『学校経営』第47巻第12号, pp. 37-42.
- 鴨川明子, 2005, 「マレー・ムスリマの進路形成とジェンダー」『早稲田大学教育学部 学術研究 (教育・生涯教育学編)』第53号, pp. 71-82.
- , 2008a, 「青年期女性の進路形成に関する質的分析 —— マレーシア・ペラ州の3つの学校を事例として」『アジア太平洋討究』No.11, pp. 239-248.
- , 2008b 『マレーシア青年期女性の進路形成』, 東信堂.
- , 2010 「マレーシアにおける女性の進路形成 —— 何に迷い, 何を選ぶか」国際経済労働研究所編『マレーシアレポート』第2号第4巻, pp. 5-20.
- 荻谷剛彦, 1983, 「学校格差と生徒の進路形成」, 岩木秀夫・耳塚寛明編『現代のエスプリ 高校生 —— 学校格差の中で』No.195, 至文堂, pp. 69-78.
- , 1995, 『大衆教育社会のゆくえ —— 学歴主義と平等神話の戦後史』中央公論新社
- 黒田美千代・三浦清司, 2001, 「学校評価の試み: 今宮総合学科の自己診断(4) —— 生徒の進路形成とガイダンス」『月刊高校教育』第34巻第9号, pp. 62-67.
- 木原孝博, 1967, 「進路指導」, 日本教育社会学会編『教育社会学辞典』東洋館出版社, pp. 622-623.
- 児島明, 2010, 「国境を越える移動と進路形成 —— 滞日経験をもつブラジル人青年の生活史分析から」『地域学論集』第7巻第2号, pp. 253-283.
- 栗山靖弘, 2012, 「スポーツ特待生の進路形成 —— 高校球児の事例を通して」『社会学ジャーナル』第37号, pp. 167-183.
- 京免徹雄, 2006, 「1960年代フランスにおける生徒の進路形成過程に関する一考察 —— ブルデュー再生産理論における「軌道」概念を用いた分析」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊第16号 —— 1, pp. 165-175.
- 丸山征一郎・山崎清男, 2010, 「体験活動を通じた企業と学校のパートナーシップについての一考察 —— 専門高校における進路形成とインターンシップの取り組み」『大分大学教育福祉学部附属教育実践センター紀要』第28号.
- 耳塚寛明, 1982, 「学校組織と生徒文化・進路形成 —— 「高校生の生徒文化と学校経営」調査から」『教育社会学研究』第37集, pp. 34-46.
- 望月由起, 2007, 『進路形成に対する「在り方生き方」指導の功罪 —— 高校進路指導の社会学』東信堂.
- 森田洋司, 2001, 「不登校生徒の性別にみる進路形成の特徴」『人文研究』大阪市立大学大学院文学研究科紀要第53巻第3分冊, pp. 1-22.
- 長尾由希子, 2009, 「専門学校への進学希望にみるノン・メリトクラティックな進路形成」『研究所報』49, pp. 109-125.

- 中西啓喜, 2011, 「地方商業高校の変容 —— 「高校生文化と進路形成の変容 (第3次調査)」より」『青山学院大学教育学会紀要 教育研究』第55号, pp. 97-105.
- , 2012, 「地方商業高校生の進路形成に関する研究 —— 「地域」を手がかりとして」『Proceedings: 格差センシティブな人間発達科学の創成 = Science of human development for restructuring the “gap widening society” 20公募研究成果論文集 Grant-In-Aid Research Award』, pp. 63-72.
- 中西祐子, 1998, 『ジェンダー・トラック —— 青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版社。
- 中村高康編, 2010, 『進路選択の過程と構造 —— 高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房。
- 西島央, 2014, 「「体育会所属大学生の学生生活と進路形成に関するアンケート」報告: 関東地区のラグビー部とアメリカンフットボール部を事例に」『人文学報 教育学』第49号, pp. 1-24.
- 野淵龍雄, 1986, 「進路指導」, 日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』東洋館出版社, pp. 521-522.
- , 1986, 「進路成熟」, 日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』東洋館出版社, p. 522.
- 尾嶋史章, 2002, 「社会階層と進路形成の変容 —— 90年代の変化を考える」『教育社会学研究』第70集, pp. 125-142.
- 大多和直樹, 2013, 「進路指導」, 大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学辞典』弘文堂, p. 716.
- , 2014, 『高校生文化の社会学 —— 学校と生徒の関係はどう変容したか』有信堂。
- 酒井朗・千葉勝吾・広崎純子・齋藤玲奈, 2006, 「高校生の進路選択に関する教育臨床学的研究(2) —— 進路形成過程における転機が存在とジェンダーの影響」『お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要』第3号, pp. 97-112.
- 榎原禎宏, 1992, 「高校生の進路形成と学校生活 —— 学校文化論に関連して」『学校経営研究』第17巻, pp. 71-83.
- 志水宏吉, 1985, 「職業高校の歴史的変容と現状 —— 高校生の進路形成を軸として」『教育学研究』第52巻, 第3号, pp. 291-301.
- 高口明久・生田周二, 1991, 「養護児童の進路形成 —— 家族的背景, 施設・学校生活及び学校卒業後の生活との関連」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』第33巻第2号, pp. 353-433.
- 竹内洋, 1995, 『日本のメリトクラシー —— 構造と心性』東京大学出版会。
- 寺田盛紀, 2005, 「キャリア形成(学)研究の構築可能性に関する試論」『生涯学習・キャリア教育研究』第1号, pp. 3-15.

- , 2009, 「職業観形成の比較教育文化的研究(1) —— 日・中・韓・印
ネの高校3年生の進路形成と職業希望の様態」『名古屋大学大学院教育発達
科学研究科紀要 教育科学』第56号第1巻, pp. 1-18.
- 上原貴夫, 2008, 「地域における複数の大学・短期大学生が結ぶ人間関係のもと
で成長する若者——若者が合同で行うサークル活動が果たす地域貢献と,
その活動が学生自らの教育・研究活動と進路形成におよぼす影響に関する研
究」『人間関係学研究』第15巻第1号, pp. 32-42.
- 上間陽子・椎林美樹・竹石聖子, 2003, 「A 高校の生徒の進路形成の特徴」『教育
科学研究』第20号, pp. 55-70.
- 山田裕司, 2005, 「高校生の進路形成に与える高大連携事業の教育効果」『九州大
学大学院教育学コース院生論文集』第5号, pp. 135-149.